

# 生き続ける歌

齊藤 梢

二回読んだ歌は、もう一度読みたくなり、三回読んだ歌は、いつのまにか読者の心の中に生き始める。

マンションを出でてきたれば目の前に落ちて  
ちるてまるぶ松笠二つ 宮 柀二  
バタロールと卵を一箇荒尾梨の四半箇分  
がわれの朝食  
選歌葉書束ねてぞ来る輪ごむなど捨つる  
を惜しみとりおく我は

丘の上の修道院の跡地に建ったマンションに、宮柀二が転居したのは、昭和五十四年の四月半ばで、自宅改築のための仮住まいであった。この年の一月から四月まで入院していた福島県の病院を退院しての、新築のマンションでの暮し。六十七歳の柀二が「自伝抄・若くかなしみ老いて苦しむ」を書いたのは、この〈三階建ての横列縦割住宅〉だ。

「木枯の音」を歌に聴き、「病もつ身」を案じて『緑金の森』から『純黄』へとすすむと、多くの〈マンションの歌〉に出会う。「マンション」という言葉には、なにか不思議な硬質な響きがある。毎日の努めでもある

散歩のためにマンションの門を出て、松笠を見つける柀二を思う時、この一首はぐっと私に近づいてくる。作者が詠んだ生活の歌は、いつしか読者の生活の中でいきいきと生き始めることにもなる。

「晩秋の落葉の季節がもつとも好きだ」と書く柀二が、老いて食べる「バタロール」を、私は街のパン屋でふと思ひ、この「朝食」の時間を思う。台所で輪ゴムを使う時には、三首目の「輪ごむ」の歌を、心の中から引つ張り出したりもする。生活空間にある〈物〉を詠む歌にある時間や感情を共有することも、歌を読む愉しみのひとつである。

ゆで玉子銀のボールに冷やしおき頭をよせてしばし吾子とねむらむ 栗木京子  
母と子のかけがえのない時間を残すこの一首は、第二歌集『中庭』(平成二年刊)にある。子を育てている時の心象のこの描き方。

「銀のボール」の冷たさと、母となった女性の心の温度。第一歌集『水惑星』の「解説」で高野公彦は「感覚的な芽えが、ひらめきが、時に五官では知覚できないものまでも感知し

てしまふのは、感覚の芯に、抽象的な、一種の科学的思考が働いてゐるせらだらう。」と言う。この言葉を得て、私はこの一首の前で今も佇む。「ゆで玉子」を冷やしながら、歌に残っている作者の時間を思う。

気の付かないほどの悲しみある日にはク  
ロワッサンの空気をたべる 杉崎恒夫  
第二歌集『パン屋のパンセ』(平成二十二年刊)をひらく時、一番はじめに読むのはこの歌。クロワッサンの「空気」を感じることができ、作者の精神性にあこがれながら、七十代から八十代に詠んだ作品を、「気の付かないほどの悲しみある日」には、しみじみと読み、そして親しむ。

いまわれはうつくしきところをよぎるべし星の斑のある蝶を下げて 葛原妙子  
『葡萄木立』(昭和三十八年刊)を読み、この一首を知った私は、蝶の「星」を見るために魚屋へ行った。「うつくしきところ」は、日常にあるのか、作者にだけしか行けない域なのか。現実を詠みつつ、葛原が見ようとしたもの、見たものは何だったのか。

歌の鑑賞は自由であり、柀はないだろう。であれば、時にはとりとめもなく歌に話しかけたいと思う。歌に生き続けている作者の心の声を聞くために。